

中世末期日本語の唇音を含んだ音韻

カ行・ガ行、ハ行・パ行・バ行、ワ行及びア行・ヤ行

—天草版 FEIQE MONOGATARI を主資料として—

溝 口 博 幸

1. はじめに

本稿では、日本語の唇音の変化の過程における中世末期の状況について考察していく。現行日本語で唇音を含んでいるのは、ハ行・パ行・バ行・ワ行などであるが、中世末期には子音と母音の間に唇音化をもたらす半母音の/w/[w]を含む合拗音を持っていたカ行・ガ行も存在したので、それらも加えなければならない。さらに、ア行・ヤ行も同時に考察していく。なぜなら、これらは直音・開拗音・合拗音の音韻的な関係を提示しながらワ行の音韻の変遷を考えるために必要だからである。したがって今回は、(1)カ行・ガ行、(2)ハ行・パ行・バ行、(3)ア行・ヤ行・ワ行の音韻について焦点を当て考察しようと考えている。その際に、これらの音韻が使われていた中世末期（室町時代末期）の状況をただ提示するのではなく、時代の前後で音韻がどのような変化をしているのか比較しやすいように表を用い整理しながら、それらの特徴をより鮮明に示していこうとするものである。なお今回は短音節について焦点を当て、長音節については別の機会に譲る。

本稿で中世末期日本語の音韻を考察していく際に、中世末期に書かれた天草版平家物語“FEIQE MONOGATARI”（1592）を主資料としていく。これは、日本語の話し言葉と歴史風俗を来日した外国人宣教師に学ばせる目的で作ったポルトガル語式のローマ字で書かれている日本語の読本の教科書である。以前から日本人に親しみのあった平家物語を底本として、聞き手の右馬の允と話し手の喜一検校が掛け合いで物語を語っていく構成になっている。この文献は、ローマ字を使い当時の日本語を子音と母音の組み合わせで表わしているため音素の表記に近く、カ行・ガ行、ハ行・パ行・バ行、ア行・ヤ行・ワ行の全てを含んでおり、当時の音韻を知るためには極めてよい資料であると言える。

2. 音韻とは、またその単位とは

まず、ここで音韻とは何か定義づけておかなければならない。また、中世末期日本語の音韻を整理していくためには、それを表わす単位は何が最適なのか見定

めておく必要がある。岸田（1998）は、「音声」が、「言語活動」において、話し手によって実際に発話される「現実としての音」であるのに対して、「音韻」は言語において、一定の言語社会の人々に記憶されている「観念としての音」であると述べている。また音聲學大辞典（1976）では、次のように解説している。

無限の変異を含む具体音は、そのまま撰取することも、再現することも不可能で結局は抽象音として温存されることになるのである。その類似性の高いものがさらに抽象化されて、聴覚印象が記憶内に定着化して来る場合に、音韻と呼ばれる。一般に音声を []、音韻を / / で表記し、例えば日本語で [m] [n] [ŋ] [ɲ] [ɸ] の5種の音声を /N/ で示そうとするのであるが、/N/ という現象は存在せず、単なる観念にすぎない。この仮想を名付けて音韻と呼びならしてきたのである。

前述の説明は、いずれも音声との対比を行ないながら音韻の概念を表わそうとしたものである。つまり、「音声」は実際に発せられる音であり、「音韻」は実際音が異なっているとしてもその言語において共通性が非常に高く同じ音であると認識した場合、それを一つと見る概念だと言える。したがって、ある音韻に関してある言語では異なった音だと考えるが別のある言語では同じものであると認識することがあり得るのである（外国語でも方言でも、また時代によって同言語でも）。別の例を上げてみる。英語では「collection（収集）」の「le」の音と「correction（訂正）」の「re」とは異なった音であると認識し、発音上も意味上も使い分けをしているのであるが、外来語になった場合ともに日本語で「コレクション」と発音するので、日本語の中では原語の「le」も「re」も異なった音とは認識せず同じ「レ」であると認識する。したがって、これらの音の場合英語と日本語では音韻としてのずれが生じているのである。先ほどの音韻 /N/（ン）について言えば、実際の音声は一つではなく、シンブン [ʃimbun]（新聞）、テントイ [tentai]（天体）、テング [tengu]（天狗）などのように [m] [n] [ŋ] 等の音声であるが、仮名書きでは「ン」であり日本語では同じ概念の音（音韻）だと認識するのである。

さて、音韻の単位についてはどうか。音の最小単位については、音素（フォニーム phoneme）であるとして考えを進めていってもよいだろう。しかし、音節（シラブル）を単位として考える中世末期日本語の場合でも、モーラ（拍）を単位とする現行日本語の場合でも、音素一つの違いだけに焦点を当てるわけにはいかない。なぜなら、同じ日本語でも子音と母音の組み合わせの種類が時代によって異なっている場合があり、どの条件下で変化の現象が起きたのかを音素一つだけの違いで表わすより、母音と子音の組み合わせたもので考えていくほうが得策だからである。次に考えなくてはならないのは、母音と子音の組み合わせであっ

ても、音節を単位として扱うのかモーラを単位とするのかということである。「音節」と「モーラ」を区別して捉える場合、前者は分節的単位として音をいくつかのまとまりで分けたものであるが、後者は時間的単位として音の長さを基準としたものであると言える。例えば、「一本」という言葉を音節の単位で捉えれば下線のように「イ ッ ポ ン」と2音節に数え、モーラで捉えれば「イ ッ ポ ン」のように4拍となる。中世末期日本語から他の実際例を上げてみる。天草版平家物語（以下FEIQEと略す場合もある）の中に次のような文がある。

（“FEIQE” p364- L10~12） 〈pはページ，Lは行を表わす。〉

conoyoua xōja fitmetno cuni nareba, vmaruru monoua canarazu xini, vō
monoua ladamate vacaruru narai gia:

「この世は生者必滅の国なれば、生まるる者は必ず死に、逢う者は定まって別
るる習いぢゃ：」

文中のfitmet「必滅」を発音 [ʔitmet] に近い仮名書きにすれば、「フィツメツ」となる。現行日本語では、「ヒツメツ」[çitsumetsu]（ヘボン式ローマ字で hitsumetsu）である。中世末期日本語では、この fitmet の例のように子音「t」の後に母音が続いて来ない閉音節を含んだものも少なからずあり、「フィツ メツ」と2音節とするほうが音のまとまりとして捉えやすく、現行日本語の「ヒツメツ」なら「ヒ ツ メ ツ」と4モーラ（拍）とするほうが適切な扱い方だと言えるだろう。しかしながら、確かにこのように日本語の中でもシラビーム言語的なものとモーラ言語的なものとが時代によっても異なっているところがありその時代の特徴として捉えられるのだが、本稿では音韻が変化した時代の前後でも見ていこうとするものであり、また開音節と特殊音（促音・入声音・撥音）などの組み合わせの音節を全て音韻表等に示すと膨大になるので、音節より少し小さい単位のモーラ（拍）を基にして比較していく。つまり fitmet の場合、音のまとまりの特徴を提示するには分節的単位である音節で表したほうがいいのであるが、現行日本語の「hi+tsu+me+tsu」と比較する場合は、「fit+met」として比べるのではなく、比較しやすいように「fi+t+me+t」（このtは入声音）としてモーラを基準にその違いを見ようとするものである。

3. カ行・ガ行、ハ行・パ行・バ行、ア行・ヤ行・ワ行の音韻

中世末期日本語の(1)カ行・ガ行の音韻においては、それらに含まれている合拗音が唇音と関係があり、(2)ハ行・パ行・バ行やワ行においては子音の変化や唇音の退化の現象が見られるが、それらが音韻の関係においてどのように進んできたかを見ていく。本稿では、(3)ア行・ヤ行・ワ行を同時に扱う。これには理由があ

る。五十音図では通常これらを独立した別々の行として示しているが、時代によってはア行が母音だけではなく半母音/y/[j]や/w/[w]が加わったものが使われているので、つまりヤ行やワ行の音に統一して用いられた時代があったので、それらの変化の関係を見やすくするために同時に扱ったほうがよいと考えたからである。また、他の行における拗音節（子音と母音の間に/y/[j]を含んだ開拗音と/w/[w]を含んだ合拗音）との関係を見やすくするという目的も持っている。

3. 1. カ行・ガ行

天草版平家物語に現れるカ行とガ行の音韻を含んだ文を見てみよう。下線の部分がカ行とガ行にあたる。

（“FEIQE” p4-L11~14）

Xicaru tocorode cano dō tera uo xenji no gotoquni fodo fete zōfit xerareta niyotte, lono vorifuxi ni °Tagima no cuniga aita uo lunauachi cudafarete gozatta.

「しかるところでかの堂寺を宣旨の如（ゴト）くにほど経て造畢しえられたに
よって、その折節に但馬の国（クニ）があいたをすなわちくだされてござ
た。」

この文中には、「カ・ク・コ」/ka ku ko/と「ガ・ゴ」/ga go/が含まれているが、他のカ行・ガ行の例も含んだ単語の例を天草版平家物語から引いて示す。

・「カ キ ク ケ コ」/ka ki ku ke ko/の例：

cairo カイロ（海路， p72-L23）、Qitayama キタヤマ（北山， p61-L9）、
jūrocu ジューロク（十六， p94-L17）、nazzuqete ナツケテ（名づけて， p65-L2
2）、cocoro ココロ（心， p72-L22）

・「ガ ギ グ ゲ ゴ」/ga gi gu ge go/の例：

Sagamino サガミノ（相模の， p333-L8）、fuxigui フシギ（不思議， p17-L16）、
cuniguni クニグニ（国々， p149-L21）、guenzan ゲンザン（見参， p62-L15）、
Innogoxo インノゴシヨ（院の御所， p229-L11）

・「キャ キョ」/kya kyo/の例：

Qiacujin キャクジン（客人， p116-L23）、qionen キョネン（去年， p144-L16）
キュ/kyu/は、“FEIQE”にも『日葡辞書』にも認められなかった。

ただし、長音節のキュー/kyu:/（:は引き音を表す）は認められる。

例：qiūxen キューシェン（弓箭，“FEIQE” p9-L14）

・「ギャ ギョ」/gya gyo/の例：

acuguiacu アクギャク (悪逆, p121-L6)、guioy ギョイ (御衣, p138-L19)、
ギユ/gyu/は、“FEIQE”にも『日葡辞書』にも認められなかった。

ただし、長音節のギュー/gyu:/は、『日葡辞書』にある。

例：Guiuxi ギューシ (牛子, 『邦訳日葡辞書』 p303)

・「クッ」/kwa/の例：

Quanbacudono クッンバクドノ (関白殿, p13-L11)、

Xunquan シュンクッン (俊寛, p20-L2)

クキ/kwi/、クエ/kwe/、クヲ/kwo/は、“FEIQE”や『日葡辞書』には見られない。

・「グッ」/gwa/の例：

monguai モングッイ (門外, p22-L13)

グキ/gwi/、グエ/gwe/、グヲ/gwo/は、“FEIQE”や『日葡辞書』には見られない。

カ行・ガ行の音韻およびハ行・パ行・バ行、ア行・ヤ行・ワ行の音韻について、中古や近世、現行の音韻と比較するために、『講座国語史2 音韻史・文字史』(1972)、『音聲學大辞典』(1976)、『岩波講座日本語5 音韻』(1977)、『日本語の世界7 日本語の音韻』(1981)、『国語音韻変化論』(1998)などを参考にしたものを同時に提示する。表内の拗音系列は、音声学的拗音の表記の仕方(子音+渡り音+母音)を取る。つまり、子音と母音の間に/y/[j](開拗音)か/w/[w](合拗音)を入れて示す。なお、中古の開拗音・合拗音については明らかになっていないところもあり表には入れないが、カ行・ガ行の直音系列は/ka ki ku ke ko ga gi gu ge go/で、拗音系列は少なくとも/kya kyu kyo gya kwa kwi kwe kwo gwa gwe/があったと考えられる。

カ行・ガ行の音韻

	直音系列	拗音系列
中世	ka ki ku ke ko	kya (kyu) kyo
末期	ga gi gu ge go	gya (gyu) gyo
近世	ka ki ku ke ko	kya kyu kyo
	ga gi gu ge go	gya gyu gyo

	直音系列					拗音系列			
現行	ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo	kwa
	ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo	gwa

* 音韻を示す//は省略。上段が無声音で下段が有声音。(kyu) と (gyu) の実際は/kyu:/ と/gyu:/で、長音節では確認されている。

ここでカ行・ガ行について見ると、直音系列は中古から現行日本語までずっと変わっていないことが分かる。また、拗音系列の中の開拗音についても変化があまりないと言っていい。しかし合拗音については、変化が大きい。合拗音については日本に漢字音が入って来て、拗音も日本語に受け入れられたのだが、中世末期の資料を見ると/kwi kwe kwo gwe/などは衰退している。しかし、表内には含めなかったが、時代が下ってヨーロッパの言語からの外来語が使われ始め、再び/kwe kwo gwa/などの合拗音も用いられるようになっていく。

カ行・ガ行においての中世末期の特徴と言えば、やはりこの唇音/w/を含んでいる合拗音の存在であろう。中世末期当時合拗音であったものは、現行日本語においては直音化している。ここで、中世末期のカ行・ガ行の音韻において、直音と合拗音が使い分けられている例を対比できるように上げてみよう。単語の例は、いずれも“FEIQE”から引用している。

・カ行の直音/ka/と合拗音/kwa/の例

加護/kago/	漢/kan/	感ず/kanzu/	所感/syokan/	閑居/kankyō/
過分/kwabun/	官/kwan/	観ず/kwanzu/	俊寛/syunkwan/	関東/kwantō:/

・ガ行の直音/ga/と合拗音/gwa/の例

害/gai/	雁書/gansyo/	岩石/ganzyeki/	顔色/gansyoku/
外人/gwaizin/	願書/gwansyo/	元日/gwanzit/	正月/syo:gwat/

3. 2. ハ行・パ行・バ行

次にハ行・パ行・バ行を含んだ天草版平家物語の文を示す。下線の部分がハ行・パ行・バ行にあたる。ただし、中世末期のハ行は仮名書きで「ハ・ヒ」などと書いても、音は両唇摩擦音の「ファ」[ɸa]・「フィ」[ɸi] などであり、“FEIQE”などキリシタン文献では「f」の字で表されている。また、感動詞の長音節であるが、声門音を表す「h」の字を使っているところもある。これは、現行日本語とほぼ同じ音価だと見られる。上村(1972)や城生(1977)は両唇摩擦音[ɸ]を

/hw/で提示しているが、/h/音との関係が見やすいと考えられるので、ここでもこれを採用することにする。

(“FEIQE” p166-L6~9)

Qilodono no vomaye ni tçui fizamazzuite caqeba, luxen no tçuuamono ga core uo mite, bunpu tomoni taxxa gia to yũte fometa.

「木曾殿のお前につい膝（フィザ）まづいて書けば、数千の兵がこれを見て、文武（ブンブ）ともに達者ちゃと言うて褒（フォ）めた。」

(“FEIQE” p299-L20)

VM. Hâ fuxidemo vomoxiroiga, tocoroni yotte qicoyecanuru: tada monogatarini mefarei.

「右馬。は一節（フシ）でも面白いが、ところによって聞こえかぬる：ただ物語に召されい。」

他のハ行・バ行・パ行の例を含んだ単語の例を“FEIQE”から引いて見る。

- ・「ハー」/ha:/の例：（ただし、これは長音節である。）

Hâ ハー（はー， p284-L22）

- ・「ファ フィ フ フェ フォ」/hwa hwi hwu hwe hwo/の例：
facaricoto ファカリコト（謀， p11-L24）、fitobito フィトビト（人々， p11-L18）、fuxigui フシギ（不思議， p17-L16）、fete フェテ（経て， p67-L17）、foroboite フォロボイテ（滅ぼいて， p68-L16）
- ・「パ ピ プ ペ ポ」/pa pi pu pe po/の例：
patto パット（ぱっと， p153-L2）、ninpinin ニンピニン（人非人， p11-L14）、jippu ジップ（実否， p9-L4）、Guêpei ゲンペイ（源平， p122-L8）、Nippon ニッポン（日本， p3-L15）
- ・「バ ビ ブ ベ ボ」/ba bi bu be bo/の例：
tçubafa ツバサ（翼， p69-L4）、futatabi フタタビ（再び， p69-L17）、yuruxibumi ユルシブミ（許し文， p72-L19）、fubete スベテ（全て， p97-L109）、Inoboreba ノボレバ（上れば， p111-L11）
- ・「フィャ フィォ」/hwya hwyo/の例：
nifiacunin ニフィクニン（二百人， p126-L2）、fiotto フィオット（ひょっと， p120-L4）

なお、フィュ/hwyu/の例は、“FEIQE”にも『日葡辞書』にも認められない。

- 「ピャ」/pya/の例：

goroppiacunin ゴロツピャクニン (五六百人, p272-L17)

なお、「ピュ」/pyu/や「ピョ」/pyo/は、“FEIQE”にも『日葡辞書』にも認められないが、『日葡辞書』に長音節「ピョー」/pyo:/は認められる。

例：Canpiôカンピョー (干瓢, 『邦訳日葡辞書』 p91)

- 「ビャ」/bya/の例：

lanbiacqi サンビャッキ (三百騎, p16-L23)

なお、「ビュ」/byu/や「ビョ」/byo/は、“FEIQE”にも『日葡辞書』にも認められないが、“FEIQE”に長音節の「ビョー」/byo:/はある。

例：nobiôcaノビョーカ (延びょうか, p314-L22)

ハ行・パ行・バ行の音韻

	直音系列	拗音系列	
中世 末期	(ha)	hwa hwi hwu hwe hwo	
	pa pi pu pe po ba bi bu be bo	hwyu hwyo pya pyu pyo bya byu byo	
近世	ha he ho	hya hyi hyu hyo	hwu
	pa pi pu pe po ba bi bu be bo	pya pyu pyo bya byu byo	
現行	ha he ho	hya hyi hyu hyo	(hwa) (hwi) hwu (hwe)
	pa pi pu pe po ba bi bu be bo	pya pyu pyo bya byu byo	(hwo)

* 音韻を示す/ /は省略。下段が有声音、それより上は無声音。(ha) の実際は/ha:/で、長音節では確認されている。(hwa) (hwi) (hwe) (hwo) は外来語で使用。/hyi/の音は [çi] 「ヒ」(硬嚙摩擦音)、/hwu/は [ϕu] 「フ」、/hwyu hwyo/は [ϕja ϕjo] 「フィャ フィョ」である。

前述したように[ϕ]の音を/hw/で示したのは、声門音/h/だけの場合と比較するためである。したがって、この表で/hw/は、子音/h/に渡り音(半母音)の/w/が加わった状態のもの、つまり合拗音として位置づけている。また、通常の音韻表では「ヒ」[çi]を/hi/と表すものが多いが、ここでは単独の/h/音ではないことを示すために/hi/に硬口蓋化をさせる渡り音/y/を加えた拗音系列に入

れた。

中古のハ行・パ行・バ行についてもはっきりしないところがあり表に入れなかったが、無声音には/hwa hwi hwu hwe hwo/「ファ フィ フ フェ フォ」（通常の仮名書きはハヒフヘホであった）があり、それに対立する有声音は/ba bi bu be bo/であった。中世末期には、声門音の/h/が使われ始めるが、感動詞の/ha:/「ハー」（長音節）だけで、他のハ行は/hwa hwi hwu hwe hwo/で、/h/を基準に考えると、母音との間に唇音化する渡り音/w/が入っている合拗音であると考えることができ、また/hwya hwyo/「フィャ フィョ」は/hw/と母音との間にさらに硬口蓋化を起こす渡り音/y/が入ったものであることを意味している。子音の面から見れば、中世末期のハ行・パ行・バ行には/h hw hwy p py b by/が同時に使われていたことになる。近世日本語のハ行では、中世末期に/hwa hwe hwo/だったものから唇音の/w/が取れ/ha he ho/となり、/hwi/からは/w/が取れさらに硬口蓋化を起こす/y/が加わり/hyi/となったものと考えられる。/hwu/については、唇音退化が起きず現行日本語でも代わりがない/hwu/のままである。ただし、カ行・ガ行と同じように現行日本語では、ハ行合拗音と言える/hwa hwi hwe hwo/が外来語として復活している。

3. 3. ア行・ヤ行・ワ行

次に天草版平家物語に現れるア行・ヤ行・ワ行の音韻を含んだ文を見てみる。

（“FEIQE” p4-L18~21）

Tadamori uo yamivchi ni xôzuru to dancö xerareta uo Tadamori mo tçutay
e qijte vomouaruru ua : vare ua nagafode no midemo naxi, buxi no iye ni
ymareta monoga,

「忠盛を闇討（ヤミウチ）にしょうずると談合しえられたを忠盛も伝え聞いて
思（ヲモ）わるるは、我（ワレ）は長袖の身でもなし、武士の家（イイエ）
に生（ウ）まれたものが、」

・「ア イ ウ」/a i u/の例：

Axicaga アシカガ（足利， p130-L4）、iqedori イケドリ（生捕， p112-L9）、
vxicai ウシカイ（牛飼， p53-L23）

なお、母音のみのア行の「エ オ」/e o/はなかった。

・「ヤ ユ イェ ヨ」/ya yu ye yo/の例：

voya ヲヤ（親， p18-L19）、yumi ユミ（弓， p22-L21）、
iye イイエ（家， p32-L8）、cayette カイエッテ（帰って， p64-L18）、

yen イエン (縁, p32-L6)、modaye モダイエ (悶いえ, p56-L7)、
Qiyomori キヨモリ (清盛, p3-L18)

(仮名表記の場合、/ye/を「イェ」「いゑ」、/we/を「エ」「ゑ」で示す。)

・「ワ ヲ」/wa wo/の例：

varauareta ワラワレタ (笑われた, p51-L13)、

xenzo ua シェンゾワ (先祖は, p3-L20)、

vomaye ヲマエ (お前, p108-L16)、vouoi ヲヲイ (多い, p122-L18)、

cawo カヲ (顔, p36-L13)

ア行・ヤ行・ワ行の音韻

	直音系列	拗音系列
中古	a i u	ya yu ye yo wa wi we wo
中世 末期	a i u	ya yu ye yo wa wo
近世	a i u e o	ya yu yo wa
現行	a i u e o	ya yu (ye) yo wa (wi) (we) (wo)

* 音韻を示す / /は省略。(ye) (wi) (we) (wo) は外来語で使用。

中古から現行日本語に渡るア行・ヤ行・ワ行の音韻を整理した表を見ると、中古と中世末期では母音単独のものは、/a i u/の3音で、近世や現行日本語とは異なっていることが容易に分かる。渡り音の/y/と/w/を含んだ音は、中古では /ya yu ye yo wa wi we wo/であったが、中世末期には/wi we/が衰退し、さらに近世で/ye/と/wo/が消えている。この/ye/と/wo/が消えた代わりに、近世では母音単独の/e o/の音が使われるようになったのである。現行日本語では、/ye wi we wo/が外来語の音として復活している。

ここで、中世末期日本語のア行・ヤ行・ワ行に焦点を戻して考えてみる。現行日本語と特に異なっている点は、母音単独の/e o/がなく、代わりに半母音/y/や/w/を含んだ/ye wo/を使っていたところである。このことは中世末期日本語の音韻の特徴の一つと言える。これは単に/e o/の代わりに/ye wo/がしていたのではなく、中古以前の「エ」/e/、「フェ」/hwe/、「エ」/we/であったものが結果的に「イェ」/ye/に統一され、中世末期でも用いられたのである。ただし、音は/ye/でも仮名書きの場合は引き続き「エ」「え」、「へ」「へ」、「エ」「ゑ」(歴史的仮名遣い)などを使っていた。また、中古以前には「オ」/o/、

「フォ」/hwo/、「ヲ」/wo/だったものも「ヲ」/wo/の音に統一されていた。ただし、これも仮名書きの場合は変化がなく、「オ」「お」、「ホ」「ほ」・「ヲ」「を」と書いていたのである。次に、音は/ye/であるが、仮名では「エ」・「へ」・「エ」と書いていたもの、音は/wo/であり仮名では「オ」・「ホ」・「ヲ」だったものを“FEIQE”から上げる。さらに、以前は「イ」/i/、「フィ」/hwi/、「キ」/wi/（歴史的仮名遣いでは「イ」「い」・「ヒ」「ひ」・「キ」「る」）であり、中世末期では/i/に統一され使われたものも取り上げて提示する。

（仮名は歴史的仮名遣い）

・音価が/ye/[je]の例

「エ」 こころえ 心得/kokoroye/ か えだ 枯れ枝/kareyeda/	「へ」 いへ 家/iyē/ うへした 上下/uysesyita/	「エ」 こゑ 声/koye/ すゑ よ 末の世/suyenoyo/
---	--	--

・音価が/wo/[wo]の例

「オ」 おく 送る/wokuru/ おご 驕る/wogoru/	「ホ」 かほ 顔/kawo/ いはり 庵/iwori/	「ヲ」 を 折る/woru/ せんごく 遠国/wongoku/
---	---	---

・音価が/i/[i]の例

「イ」 かい 權/kai/ ざいけ 在家/zaike/	「ヒ」 おも で 思ひ出/womoide/ か ひ 甲斐/kai/	「キ」 ゐ 居る/iru/ ゐ こん 遺恨/ikon/
---	---	--

4. まとめ

本稿では中世末期日本語の唇音を含んでいるカ行・ガ行（合拗音）、ハ行・バ行・パ行・ワ行、また関連のア行・ヤ行の音韻を変化の流れの中のある時期として焦点を当てた。

カ行・ガ行については、ここで見てきたように中世末期には合拗音（子音+唇音の半母音/w/+母音）の存在が特徴的であるが、現行日本語のカ行・ガ行には、外来語以外は/w/を含んだ合拗音がなくなり直音化している。また、一口に「ハ行」といってもその音価は同じではないことも表に整理して示した。中世末期のハ行は後に/h/音も加わるが主流は/hw/[∅]音であった。この音になる前は両唇破裂音の/p/[p]（橋本1950、小松1981）であり、音価は/pa pi pu pe po/

「パピプペポ」だった。現行日本語のハ行の音を基準とすれば、中世末期はファ行となり、それ以前の音はパ行と呼んでよいかもしれない。因みに「ハ行転呼音」は、「ファ フィ フ フェ フォ」の/hw/[Ø]が、ワ行の半母音/w/に変化したのであるからむしろ「ファ行転呼音」と呼ぶ方が、その変化を整然と説明できるし理解しやすい。例えば、現行の助詞の「は」はこのように書き発音は[wa]であるが、元の音は/ha/でなく、/hwa/から/wa/に変化したと音素を使い説明すべきであろう。

ア行・ヤ行・ワ行の関係においては、中世末期には母音のみの/e/ や/o/がなく、半母音/y/と/w/を含んだ/ye/と/wo/の発音であったが、現行日本語では/ye/と/wo/はなく（外来語としては使用）、半母音/y/と/w/が取れ/e/ と/o/になっている。/wo/の変化を「顔」という言葉について見てみれば、中世末期では/kawo/であるが、その前後をあわせると「/kahwo/カフォ→/kawo/カヲ（ハ行転呼）→/kao/カオ（唇音退化）」という流れが見えてくる。

カ行・ガ行、ハ行、ワ行の音韻変化の流れを見ていくと次のようになる。

軟口蓋破裂音/k g/と両唇軟口蓋音/kw gw/ ⇒ /k g/

両唇破裂音/p/ ⇒ 両唇摩擦音/hw/ ⇒ /hw/と声門音/h/ ⇒ /h hw hy/

両唇軟口蓋音/wa wi we wo/ ⇒ /wa wo/ ⇒ /wa/（使用種類の減少）

「唇音」使用の状況という観点で見ると、カ行・ガ行は唇音を含んだ合拗音が直音へ、ハ行の主流が両唇音から声門音へ変化したこと、またワ行の使用種類の減少から、流れは唇音退化の方向に進んでいると言える。その中において中世末期は、まだ唇音使用はかなり保たれていた時期と見る事ができる。

今回は、主に短音節を見てきたが、長音節の場合にもオ段長母音の開合のほか長母音・連続母音などに現行日本語とは異なった特徴があり、興味深いところである。また、サ行・ザ行、タ行・ダ行、ナ行、マ行、ラ行についても、別の機会に整理してまとめたいと考えている。

参考文献

猪塚元・猪塚恵美子著、町田健編（2003）『シリーズ・日本語の仕組みを探る 2 日本語音声学のしくみ』、研究社

上村幸雄（1972）「現代の音韻」『講座国語史 2 音韻史・文字史』pp269-309、大修館書店

江口正弘・溝口博幸（2005）『天草本平家物語資料大成』CD-ROM版、尚文出版
*『天草版平家物語』（1592）自体は、不干ファビアンが執筆したもので、原本はロンドンの大英図書館に所蔵されている。

- 大野晋 (1977) 「音韻の変遷(1)」『岩波講座日本語 5 音韻』pp147-219、岩波書店
_____ (1980) 『日本語の世界1 日本語の成立』、中央公論社
- 大野晋・土井忠夫・中田祝夫・松村明・吉田澄夫 (1959) 『改定版 日本語の歴史』、
至文堂
- 奥村三雄 (1972) 「古代の音韻」『講座国語史 2 音韻史・文字史』pp63-171、大
修館書店
_____ (1977) 「音韻の変遷(2)」『岩波講座日本語 5 音韻』pp221-252、岩波
書店
- 小松英雄 (1981) 『日本語の世界 7 日本語の音韻』、中央公論社
- 亀井孝 (1984) 『亀井孝論文集 3 日本語のすがたところ (一)』、吉川弘文館
- 岸田武夫 (1984) 『国語音韻変化の研究』、武蔵野書院 (1998) 『国語音韻変化論』
武蔵野書院
- 窪園晴夫 (1999) 『日本語の音声 現代言語学入門 2』、岩波書店
- 柴田武 (1962) 「音韻」『方言学概説』国語学会編、武蔵野書院
- 城生佰太郎 (1977) 「現代日本語の音韻」『岩波講座日本語5 音韻』pp147-145、
岩波書店
- 外山映次 (1972) 「近代の音韻」『講座国語史 2 音韻史・文字史』pp173-268、
大修館書店
- 中田祝夫 (1972) 「総説」『講座国語史 2 音韻史・文字史』pp5-61、大修館書店
- 橋本進吉 (1950) 『国語音韻の研究』、岩波書店
- 松崎寛 (1993) 「外来語音と現代日本語音韻体系」『日本語と日本文学』第18号、
pp22-30、筑波大学国語国文学会
- 溝口博幸 (2002) 『FEIQE MONOGATARI翻刻版』第 2 版、大東文化大学大学院
文学研究科日本文学専攻 発行
_____ (2005) 『天草版FEIQE MONOGATARIの音価と動詞語形の研究』博士
論文、大東文化大学大学院へ提出
- 森田武 (1977) 「音韻の変遷(3)」『岩波講座日本語5 音韻』pp253-280、岩波書店
- 柳田征司 (1993) 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』、武蔵野書院『音聲學
大辞典』(1976) 日本音聲學會編、三修社『邦訳日葡辞書』(1980) 土井
忠生・森田武・長南実編訳、岩波書店
- * 原本 “VOCABVLARIO DA LINGAO DE IAPAM” 『日葡辞書』は、
イエズス会宣教師編、イエズス会刊 (本編1603) (補遺1604) である。